本文第一段

9行

新しき世紀への希望

保田與重郎

皇紀二千六百年を迎へることとなつた。コギトは すでに過去九十冊を送り、新しい年の始めに、第九十一冊をさすわけである。百年とは、我々の歳月、人の変革と発展とを想ふことは、恐らく世紀的理由があらう。わが国の歴史のものの発生は、さうした因縁を含んで遂行し得るのである。

我々は過去の百年のおのおのを、まづ、百年まへの日によつて決定されたものとしてみる。二千六百年の初頭は幕末攘夷論のまさに沸騰点にあつた。それは明治の維新を新しくする前夜であつた。即ち保守化にあらずして、のこるところなく合理化することである。しかるに、我々は、今日のはの